

「中之島に鼬を放つ」 大学博物館と共創するアート人材育成プログラム

目的と概要

本プログラムは、大阪大学大学院人文学研究科と大阪大学総合学術博物館が共同で主催し、近隣地域の劇場・音楽堂・美術館等と連携して、主として社会人のためのアートマネジメント人材育成プログラムを推進することを目的として開催した。

プログラム名の「中之島に鼬を放つ」の「中之島」は、大阪大学の発祥の地であり、大阪市の中心ともなっている「中之島」だけを指すのではなく、ここにも、あそこにも、あるいは私たちの心の中にもある、生まれ出ずる場所、何か自分たちの拠り所となる場所、どうしても捨てることのできない場所のことを示している。なお、2023年度には、「大阪大学中之島センター」を改修し、芸術に関する研究教育の拠点を組織し、その中に「大阪大学中之島芸術センター」を設置する予定である。また、「鼬」はよく知られている、神出鬼没にして、好戦的、異臭を放って敵をひるませ、逃げ足も速く、夜行性でもあって、都市農村の区別なく出没する鼬を指す。鼬は、全国でもっとも多く大阪に潜むと噂されているが、この時代の私たちのアートを喩えるのにまたとない生き物のように思われる。私たち自身が鼬に身をやつし、鼬こそがアートだと一斉に街中に放擲し、また逆に鼬に翻弄されて、そんな鼬に我が身を預けていく。現代のアートとはまるで都市の鼬のようである。しかし、そうやって鼬とともにあることは、このグローバル化の終わりの時代を誠実に生き抜いて行くための、一つの知恵の証のようにも感じられ、「鼬」と名付けている。

今日のアート人材には、多様な芸術ジャンルに精通し、現代文化の複雑な諸課題に柔軟に対応できる実践力が求められている。このプログラムでは、学際性に富み、アーティストとの交渉能力を備え、地域社会とのファシリテーション力を持ち、アート創造のプロセスに関わることのできる能力を持つ人材の育成を目指した。本プログラムは、人文学的な知見を活用しつつ、アートマネジメント能力を発揮できる人材を育成することをねらいとして、令和5年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」に申請し、採択された。本プログラムは、3年計画のもので、令和5年度を準備期間、2年度目は展開期間、3年度目を実践期間と位置づけ開催してゆく。このプログラムは、3年度毎に名称と形を多少変えながら、すでに10年以上続いてきたものである。

この事業は、令和4年4月に改組により新しく設置された「人文学研究科」が主催し、「適塾記念センター」「大阪大学アーカイブズ」と統合された「大阪大学総合学術博物館」と共催して推進したプログラムである。人文学研究科芸術学専攻と総合学術博物館の教員が中心になり、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）、大阪中之島美術館、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール、公益財団法人吹田市文化振興事業団（メイシアター）、浄るりシアター、豊中市都市活力部文化芸術課、公益財団法人メイプル文化財団といった芸術諸機関と連携して実施した。また、それらの芸術諸機関からアドバイザーを迎え、事業担当者とともに「大学博物館と共創するアート人材育成プログラム協議会」を組織し、プログラム全体を監督し、評価に努めた。「大学博物館と共創するアート人材育成プログラム協議会」は、会議にて、アドバイザーから具体的で専門的な助言をうけた。

本プログラムでは、アート人材育成のために、「統括セッション」と4つの「リサーチ・フレーム」（「場所のナラティブ」「アートとその分身」「臨床のアート」「日常のポイエティック」）を設定し、縦横に交差しつつ学びながら、総合的なアート実践能力を育成した。現在様々な分野で活躍する、アーティスト、アートディレクター、アートマネージャー、研究者等と受講生とが交流を深め、ネットワークを構築し、アートによる多面的な価値の創出を目指した。各リサーチ・フレームの中に、レクチャー、リサーチ、ワークショップ、クリエーションという4つのステップを組み込み、それぞれの



「中之島に鼬を放つ」ポスター

手法で基礎から応用、そして成果公表まで柔軟に配置し、プログラムを充実させるとともに、効果的に教育できるよう留意した。このように、「アート・プラクシス」の力を養った、今日的で未来的なアートマネジメント人材を、文学研究科における研究基盤との接合により、新しく生み出していくことを目標とした。研修の受講者は、芸術系諸機関で働く人々や働くことを希望する社会人などを中心にして広く公募し、27名を受講生として受け入れた。受講生が受講した研修科目の「統括セッション」と「リサーチ・フレーム」については、以下の通りである。

統括セッションは、「オープニング・セミナー」「アート・リング ～アートのエコシステムへのいざない～」、「クロージング・シンポジウム」の3つの要素からなる。

「オープニング・セミナー」は文字通り、プログラムのキックオフであり、事業についてのオリエンテーションを行い、それぞれのリサーチ・フレームについて説明を行うなど、事業担当の教員全員が集まってプログラム全体の仕組みや見通しを説明した。また、大阪大学総合学術博物館で開催していた展覧会、「大阪大学総合学術博物館第16回特別展「モダン中之島コレクション “大大阪”時代の文化芸術発信センター」」の鑑賞も行った。

「アート・リング」はデジタル・アートを中心として、その現代における担い手（作り手ばかりではなく、技術的・経済的な仲介者も含む）を招いて行うシンポジウムである（オンラインで開催）。

さらに「クロージング・シンポジウム」は、次に述べる4つのリサーチ・フレームで得た知見を元に受講生がプレゼンテーションを行い、アドバイザー、事業担当者、受講生で意見交換を行った。

それぞれの事業担当者が実施した4つのリサーチ・フレーム（「場所のナラティブ」「アートとその分身」「臨床のアート」「日常のポイエティック」）における事業は、より具体的・個別的なものである。リサーチ・フレームは、それぞれの手法で基礎から応用、そして成果公表まで柔軟に配置し、事業担当者とアーティストなどの講師がそれぞれの枠組みを担当し、その課題に応じたアート・プログラムを推進した。これらのフレームはそれぞれ重なりがないように実施し、受講生はこれらの4つのフレームを無理なく受講できるようにプログラムした。

第一の「場所のナラティブ」では、「都市のアルケオロジー」と題し、幾重にも文化的社会的な地層が集積している場所・大阪中之島を舞台に、この地層をリサーチしながらパフォーマンスに繋げることを目的とした。プログラムでは、(A) 大阪の都市の歴史的な地層をパフォーマンスにより掘り起こす仕事を続けている、劇作家・演出家の林慎一郎によるワークショップとパフォーマンス、(B) ツーリング・リサーチとして、中之島境界のリサーチ・ウォークと、水路から中之島の場所の記憶を掘り起こす船上ツアーを軸に推進した。最終的には、レクチャー、リサーチ、ワークショップをもとに、演劇公演「中之島デリバティブ」を吹田メイシアターにて上演した。

第二の「アートとその分身」では、「人間／人形の間」をテーマにしたプログラムを開催した。「人形」は人間／モノ、人間／機械、有機物／無機物の間に存在し、またその両者にまたがって現象する。古来、私たちは、人形に人間を演じさせること、人間が人形を演じることに憑かれ、魅せられてきたことに着目し、次の3つのプログラムを開催した。すなわち、(A) 人間が人形を踊る（「人形の精と踊る私」）、(B) 人形浄瑠璃の人形を用いて音楽劇を上演する（「人形の音楽劇」）、(C) 人形浄瑠璃の人形のパフォーマンスに対して視覚障害者のための音声ガイドを作る（「人形芝居を聴く」）、である。

第三の「臨床のアート」では、「walking practice 同じ景色をみよう」と題し、現代美術家の檜皮一彦が実践しているワークショップ、「walking practice」を通して、現代社会におけるさまざまな問題について考えるきっかけとした。プログラムは、(A) アーティスト・檜皮一彦本人と受講生との対話、(B) 「walking practice」ワークショップの体験、(C) 身体のあるあり方を実践的に研究している研究者や、現代アートに精通する研究者の講演、(D) (A)～(C)における過程や結果、成果などを展覧会によって発表、とした。展覧会は、「くるまイスでGO! どうする★バリバリア」というタイトルで、大阪大学総合学術博物館にて開催した。

「日常のポイエティック」では、大阪に存在する様々な工場の匠たちを訪ね、インタビューを重ね、数々の製品を写真におさめるなどして、工場や工場の製品をアーティストックにとらえなおし、アートとは何かを考える「町工場アートの可能性を探る」を開催した。次の(A)～(D)の順に、プログラムを開催した。(A) 大阪の町工場の現在について、様々な事例をもとに、講師による講演を行う。また、アートとは何か、デザインとは何か、という根本的な問いについて

も講師による講演で学んだ、(B) 冊子作成の方法、情報の発表の仕方などについて、実践的なワークショップを実施した、(C) 工場見学を通して、匠のインタビューや写真、動画の撮影を行い、冊子作成の方法についても調査した、(D) プロダクションとして、実際に冊子作成を行った。プロのデザイナーとの交渉を経て、冊子を作成する方法を学びつつ、工場をアーティスティックに発信する方法を探った。

成果と将来

受講生は、全体を統括するセミナー「統括セッション」や、各事業担当者が推進する実践的な活動である4つの「リサーチ・フレーム」に参加し、プログラム履修を進め、年度末にレポートを提出した。活動への貢献度、出席率、レポートを総合的に判断し19名の受講生に修了証を授与し、アートマネジメント人材を育成した。

今日のアート人材には、多様な芸術ジャンルに精通し、現代文化の複雑な諸課題に柔軟に対応できる実践力が求められている。このプログラムでは、学際性に富み、アーティストとの交渉能力を備え、地域社会とのファシリテーション力を持ち、アート創造のプロセスに関わることのできる能力を持つ人材の育成を目指した。本プログラムは、人文学的な知見を活用しつつ、アートマネジメント能力を発揮できる人材を育成することをねらいとして、

アート人材育成の目標として、多様な芸術ジャンルに精通し、現代文化の複雑な諸課題に柔軟に対応できる実践力を養い、人文学的な知を活用したアートによる課題解決などを設定した。本プログラムでは、約7割の受講生に修了証を授与することができた。「中之島に馳を放つ」のプログラムでは初年度から、レクチャー、リサーチ、ワークショップ、クリエイション(プロダクション)の順を追って学習できるようプログラムし、アーティストとの対話や、クリエイション(プロダクション)に向けた時間を設けることもできた。この数年続いていた新型コロナウイルス感染症の影響もあったが、引き続きオンラインやオンデマンドでプログラムを提供する方法も活用した。先に述べたように、10以上続く事業ということもあり、リピーターが増えたため、1年目から、受講生にプログラムの一部を託すことも実現した。2年目、3年目以降には、より具体的な「受講生企画」を実施することも計画している。育成事業としても、成果のみならず、多様な人々とのネットワークが形成でき、実り多いものとなった。

2023年度からは、社会人と学生とが共に学ぶ新しい形式を探求すべく、大阪大学の芸術・アートを活用した社学連携の拠点とする計画である「中之島芸術センター」の開設を予定している。中之島センター内の芸術センターにおいて、芸術の研究・教育の拠点を置き、研究や教育プログラムとして展開を計画している。「中之島に馳を放つ」のプログラムも2年目からはこの「中之島芸術センター」を中心に開催していける予定となっており、社学連携的な芸術文化事業を展開していく。

(伊東 信宏・山崎 達哉)